

夏の星空の物語

小学4年生の時、夏休みの読書感想文コンクールで学校代表に選ばれたことがありました。名前は忘れましたが、対象とした本は星の図鑑でした。星や星座の図や解説は興味深く、ワクワクした気持ちになり、実際に確かめたくて、戸外に出て夜空を眺めました。その体験をそのまま文章にしたのです。果たしてそれが読書感想文と言えるのかどうか、若干不安でしたが、先生が県のコンクールに応募してくれました。その図鑑の星の話の中で最も印象深く覚えているのが、こと座のベガという星のことです。「ベガは夏の夜空で天頂付近に輝く最も明るい星で青白い色をしている」ということでした。図鑑でそのことを知り、天空に青白く眩しく輝くベガを見つけた時は、それだけで大きな感動を覚えました。

夏の夜空の有名な物語といえば、何と言っても七夕伝説に基づく牽牛星（けんぎゅうせい・ひこ星）と織女星（しょくじょせい・織り姫）の一年に一度の逢瀬でしょう。この織女星とされるのがベガです。そして、牽牛星がわし座のアルタイル。これに、はくちょう座のデネブを加えた夏の夜空で一段と明るい星3つが「夏の大三角形」を形作ります。旧暦の7月7日（今年は8月28日）ごろの夜中には、この大三角形が天高く輝き、ベガとアルタイルが天の川を挟んで相對し、デネブの属する白鳥が仲を取り持ち川の上を飛んでいるように見えるのです。天体一面に無数の輝く星たちは古くから人々の想像力を駆り立て、七夕の伝説をはじめ、世の東西にさまざまな言い伝えや物語を生んできました。満天の星空を見上げると、光が全身に降り注いでくるように感じ、宇宙が自分の命につながっているような気持ちになれます。星に願いをかけながら幸せな気分になれるのです。

そんな星空（や青空）を大切にしまちづくりをしようという自治体が集まる第30回「星空の街・あおぞらの街」全国大会が来年10月に本市において開催されることが内定しました。本市ではこども未来館に新しいプラネタリウムができましたし、お隣のさぬき市には昨年3月、全国初の天体望遠鏡博物館もオープンしています。これら関連施設も巻き込んで高松の星空をどうアピールしていくのか。久しぶりに夏の夜空を眺めながら考えを巡らせてみたいと思います。